よることとし、節付けは省略して、読みやすくするようにした。また、西鶴の浮世草子の引用は、日本古典文学全集『井原西鶴集』(1)（小学館　昭和四十六年）により、『落葉集』は『日本歌謡集成』巻六（春秋社　昭和三年）によった。



『近松の女性たち』目次


はじめに　3

I　世話浄瑠璃の女主人公――7

II　近松の女性たち――11

おはつ　愛に殉じて　11
おしま　相手の立場を理解して　22
おかめ　幼な妻の哀れ　30
おなつ　いちずに恋して　39
おたつ　妻なるが故に　46
滋野井　母の悲嘆　55
小まん　献身の行方　64
小かん　武家の娘のいさぎよさ　73
あづま　傾城の真情　80
お　梅　純真な娘の恋　87
おまん　娘であることの哀れ　94
おたね　夫を慕いつつも　101
おきさ　年たけた女の哀れ　109
梅　川　すべてを受け入れて　116
夕　霧　傾城にまことあり　125
お　花　愛したものの因果　137
おさん　激高のあまり　142
おさが　夫の父を思いやって　152
おさゐ　武士の妻のいたましさ　158
吾　妻　名妓の情け　167

小女郎　片翼の身の果て　173
小　春　心中よしいきかたよし　181
おさん　義理と愛のはざまで　190
お　吉　やさしさ故に　196
おちよ　夫を信じ愛して　208
III　近松の女性の愛　216
近松門左衛門年譜　220
あとがき　228



# I　世話浄瑠璃の女主人公

近松は生涯に二十四編の世話浄瑠璃を書き残している。これは、近松の百編以上にも及ぶ浄瑠璃の数からみれば四分の一にも満たない量である。しかしこの二十四編の世話浄瑠璃には、当時のさまざまな庶民が登場して、庶民の喜怒哀楽が、あたかも一大曼陀羅のように織りなされている。当時の人々に歓迎され、大きな共感を呼んだこの世話浄瑠璃は時代を超えて現代の我々にも深い感動を与えずにはおかない、不思議な魅力を持っている。

世話浄瑠璃の最初の作品「曽根崎心中」の初演は元禄十六年（一七〇三）四月であった。まさに元禄年代が終焉を迎えようとしている時期であり、翌年三月には宝永年代に入ることになる。五代将軍綱吉の治世によって元禄文化の花が開いたのであったが、社会の各所には、強硬に急いだ幕藩体制の矛盾が避け難い亀裂となって現れはじめていた。その象徴ともいうべき赤穂義士の討ち入り事件は、元禄十五年十二月のことであった。世の不安は心中や殺害事件ともなって現れ、宝永元年（一七〇四）刊行の『心中大鑑』には、金に詰まって、生きる望みを失った男女の心中事件が集められて、当時の世相を伝えている。元禄の世は、表面的には平和で泰平の世ではあったが、幕藩体制が強制的に整えられた結果、人々の生活は圧迫され、はけ口を失った息苦しさにあえぐようになっていたのである。

れぞれの作品の中に、それぞれの登場人物はそれぞれの情を持って生きる一人の人間として登場しているのである。

近松は世話浄瑠璃において、特に女性に注目して作品を構想する方法を一作ごとに深めていったように思われる。世話浄瑠璃には、それまでの浄瑠璃や歌舞伎には見られなかった魅力的な女性が数多く造形されている。それらの女性は、浄瑠璃の内容の奥深くにかかわって、浄瑠璃全体の進行・展開を左右する存在ともなっている。女主人公を見ることで、近松がその浄瑠璃で何を訴えようとしたかを見極めることができるのである。

近松世話浄瑠璃に登場するさまざまな女性たちに焦点を当てることは、近松の心を、そして近松の世界を知ることになるのである。



# II　近松の女性たち

## おはつ　愛に殉じて

（曽根崎心中）

おはつは「曽根崎心中」のヒロインである。「曽根崎心中」は近松の世話浄瑠璃の最初の作品であり、元禄十六年（一七〇三）五月、大坂竹本座で初演、近松五十一歳の作である。

おはつは醤油屋の手代徳兵衛と心中する。時におはつは十九歳、徳兵衛は二十五歳であった。大坂堂島新地天満屋抱えの遊女おはつは、夏のある日、大坂三十三ヶ所の観音札所を巡拝する。おはつは駕籠に乗っていたが、駕籠の中はかえって暑苦しいと、まばゆい夏の日射しの下に降り立つ。そのおはつの姿は、顔佳花（かおよばな）とも呼ばれる杜若（かきつばた）にもたとえられる美しさで、おはつという名にふさわしく、咲きはじめた初花のような初々しさであった。おはつは天満の大融寺を起点として三十三ヶ所の巡礼にと歩き出す。

観音の霊験は罪償を消滅して幸せを恵み給うという。杜若のような器量好しの女は何を祈り